

法隆寺金堂壁画玻璃版複製 全12幅

ついでこの間の事である。送付されてくる概ね所期の目的を果たした各種展覧会ポスターを整理している時、岡山県笠岡市立竹喬美術館で2007年1月20日から3月4日まで開かれていた「法隆寺金堂壁画—コロタイプ版複製を中心として—」と題する展覧会があった事を知った。話題になっているコロタイプ版複製全12幅は我々の美術工藝資料館も蔵する処である事を思い起こし、これを期にこの資料に就て初めて触れることにしたい。法隆寺金堂壁画コロタイプ版複製全12幅は元々三度に亘って購入受け入れた図書として登録されていた(oBNs.18753~18756; Acq.1937.08.05、oBNs.18815~18818; Acq.1937.11.08、oBNs.18859~18862; Acq.1938.01.20、oBNs:旧図書番号)。合計5,000円(当時)

という極めて高価な図書で、貴重な資料として処遇されていた事が想像されるのである。昭和18年(1943)8月1日に美術工藝品に分類替えされ、美術工藝資料館設立後に蔵品として改めて登録されたという経緯を図書台帳によって識る処である。金堂外陣を囲む

壁画は金堂内部を荘厳するものであり、大壁4面の壁画は釈迦、阿弥陀、弥勒、薬師の四方四仏の浄土が描かれ、小壁8面には各1体ずつ普賢菩薩像や十一面観音像など菩薩像が描かれている。長安の仏教寺院壁画に倣って制作されたものと考えられるが、当時の寺院は残っていない。しかしそれらの様式の直接的影響を受けたとされる初唐の敦煌石窟寺院壁画と金堂壁画の間には様式的つながりを見ることができる。金堂は天智9年(670)の火災により焼失、その後まもなく再建されたとみられ、壁画の制作年代も金堂の再建から時期を隔てない七世紀末頃と考えられている。よく知られているように法隆寺金堂内陣は昭和24年(1949)1月26日、漏電により全焼、外陣を飾っていた大小12面の壁画の大部分が焼失してしまった。焼損前の姿を伝えるものとして、現在では焼損前に撮影



阿弥陀浄土図(阿弥陀三尊)(AN.3625-06(部分))

された写真と模写作品が残っているだけである。この度の笠岡での展覧会にはコロタイプ版複製と、模写作品の一部が展示されていたのである。

法隆寺金堂内部が初めて公開されたのは江戸時代中頃であるという。明治初期には、日本美術を高く評価し、世界に広めたフェノロサや岡倉天心によって、金堂壁画は世界にも知られる処となった。岡倉天心は廃仏毀釈の影響で劣化が進んでいた壁画の保存のための委員会の設置を提唱し、保存方法の調査が始まった。昭和9年(1934)には文部省に法隆寺国宝保存事業部と、現場に法隆寺国宝保存工事事務所が設置される。この保存工事事務所初代所長に任命されたのは武田五一であった。(武田

五一に就いては茲では触れない。)金堂は解体修理を予定しており、それにとまなう壁画の保存対策が協議された。保存方法の模索が続く中、昭和10年(1935)、文部省は便利堂に壁画の原寸大撮影を依頼し、同年から撮影は始まった。便利堂はこの撮影のために特殊撮影装置を作成し、

フィルムは英イルフォード社に全紙版(455×557m/m)を発注さえたという。撮影終了後、モノクロ焼付3組が作成され、文部省に納入された。焼付は変色の恐れがあるため、更に昭和12年(1937)にコロタイプ版原寸大複製23組が作成された。コロタイプ印刷は約150年前にフランスで生まれた印刷技術である。ガラスの板を原板に用いることから、日本では「玻璃版」とも呼ばれていた。このコロタイプ版複製は国立大学図書館、官公立博物館、ボストン美術館、大英博物館などに頒布され、本校の前身である京都高等工芸学校にも納入された。もとよりこれを奨めたのは誰であったかは詳かではないにせよ、武田五一の推挽に拠る処であろう事は容易に察しが付く。納入先に就ては事務所の斡旋で予約希望者が集められたようであるが、高等工芸学校がこれに応えた形を取って

いる。序でに言えば納入業者は法隆寺今井文英氏であり、法隆寺国宝保存工事事務所の事務主任を務めていた人物である。

昭和14年(1939)には伊東忠太を委員長として20人の壁画調査委員会が組織され、金堂壁画の模写には橋本明治、中村岳陵、入江波光、荒井寛方など12人の画家が当たった。昭和10年に便利堂が撮影した原寸大写真原板のコロタイプ印刷本を下図に用いて模写が進められた。しかし、狭い室内での作業は思うようには進まず、戦局の悪化もあってこの模写事業は中断を余儀なくされた。休止されていた壁画模写が再開されたのは昭和22年(1947)、壁画模写は継続の途次にあつて、昭和24年(1949)、大惨事に見舞われる。『法隆寺国宝保存工事事務所日記』には当時の様子を以下のように伝えている、「午前七時二十分頃金堂屋上ヨリ火ノ手ガ上リ内部、天井、貫ヲ焼失、壁画面焼失シ、八時二十分頃鎮火」と。早朝に出火、報せにより関係者が駆けつけたときには金堂内陣より火が噴き出しており、わずかな時間で外陣の12面の壁画も焼損した。(修理のために取り外されていた内陣小壁(飛天図)は難を逃れた)国宝に指定されていた金堂壁画の損失は、日本のみならず世界中に衝撃を与えた。このことが契機となって、文化遺産に対する保護意識は高まりを見せ、昭和25年(1950)に文化財保護法が制定されたのは、苦い経験故の事であった。金堂火災から15年後の昭和40年(1965)、朝日新聞社から法隆寺に壁画の再現事業が提示される。当初の壁画模写は結局未完に終わっていた。法隆寺はこれに応じ、昭和42年(1967)から再現模写事業を開始する。安田靫彦、前田青邨、橋本明治、吉岡堅二を中心に14名の画家(助手が41名)が制作に携わった。前回の壁画模写事業と同様に、原寸大写真原板をコロタイプ印



阿弥陀浄土図(観音)(AN.3625-06(部分))

刷した和紙に直接彩色していく方法がとられた。またこの時、便利堂が原寸大写真とともに撮影していた4色の原色分解写真と赤外線写真、そして昭和15年から行われた壁画模写を参考にして再現模写が進められたと伝えられている。翌昭和43年(1968)再現模写は完成し、パネルに額装した後に金堂外陣の壁面に収められたのである。失われた壁画はアクリル樹脂で固められ、現在法隆寺内の収蔵庫に保管されているという。

昭和25年(1956)11月10日に郵政省が書簡用の10円通常切手を発行した。まだ銭の単位が残っている時代であり、官製葉書が5円であった頃の話である。手紙が10円で郵送された時代。その図柄を飾ったのが6号壁画の「阿弥陀浄土」図の一部、本尊の右側の「侍者観音」の頭部がくっきりと白地に赤で描かれていた。これに消印が加わると、それはもうメール・アートの世界であったと記憶される向きも多いのではないだろうか。そして再び「侍者観音」像が1995年2月22日、第一次世界遺産シリーズ第二集、80円切手に登場したことは記憶に新しい。以下資料館が蔵する法隆寺金堂壁画玻璃版複製全12幅の資料データを記しておこう。

蔵品番号	本紙寸法(cm)	壁画番号	壁画法量(cm)	画主題
AN.3625-01	313.3×258.5	1号	314×265	釈迦浄土カ
AN.3625-02	307.4×151.0	2号	313×158	半跏思惟菩薩
AN.3625-03	307.5×150.5	3号	313×158	観音菩薩
AN.3625-04	308.5×149.8	4号	312×156	大勢至菩薩
AN.3625-05	311.2×159.5	5号	313×158	半跏思惟菩薩
AN.3625-06	310.5×263.0	6号	313×267	阿弥陀浄土
AN.3625-07	308.2×151.7	7号	309×155	聖観音菩薩カ
AN.3625-08	312.0×158.5	8号	312×158	文殊菩薩カ
AN.3625-09	305.5×257.2	9号	310×267	弥勒浄土カ
AN.3625-10	310.6×249.4	10号	312×264	薬師浄土カ
AN.3625-11	311.0×157.8	11号	313×159	普賢菩薩
AN.3625-12	313.0×153.0	12号	315×159	十一面観音菩薩

(美術工藝資料館 教授 竹内次男/事務補佐員 長谷川容子 2007.05.25)